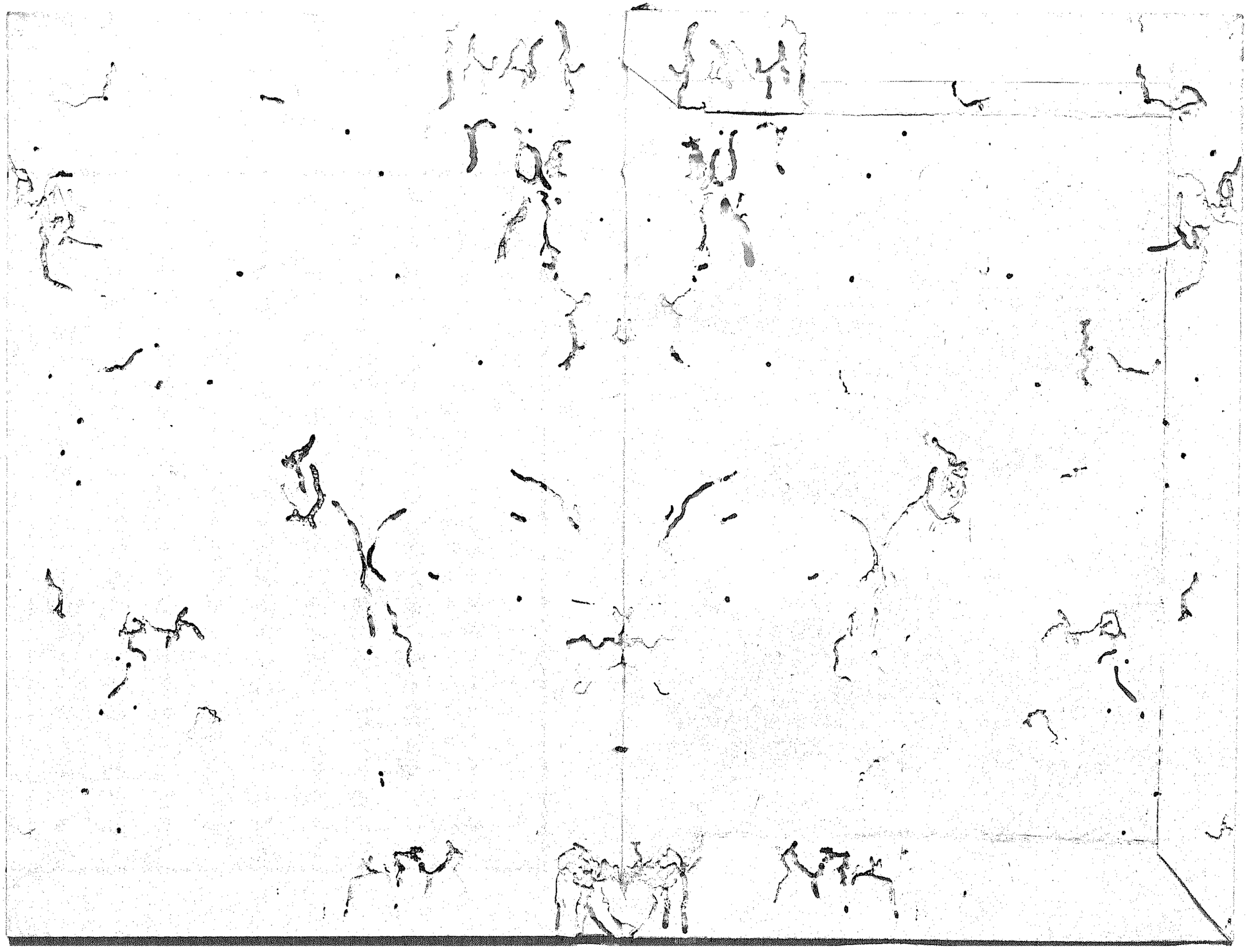
多度神宮畧縁起

伊藤文庫
19



帝國圖書館藏

多度大神宮畧縁起

多度大神宮（宮号宣下有し度々物かを所見ざれども。稱續日本後紀に。大神宮と正しく見えたり。）奉るを。延喜式に載る神名帳に。伊勢國桑名郡多度神社（名神大）や有て。同書の名神祭式に出て。朝廷御祈の時々に奉らせ給ひし物を。絶五尺。綿十兩。絹五色薄絶各一尺。木綿二兩。麻五兩。畧料。薦廿枚。若有大禱者。加絶五丈五尺。以布一端代絲一絇と有て。古昔をかくれをく祭らせ給ひ。又神階を授奉り給ひし度を。桓武天皇。延曆元年十月朔日。從五位下。仁明天皇天長十年四月廿三日。正五位下。同承和六年十二月九日。正五位上。同十一年六月四日。從四位下を授奉り。文德天皇嘉祥三

年九月十日。列於官社。同三年十月九日。預於名神。清和天皇。貞
觀元年正月廿七日。正三位。同年二月十七日。從二位。同五年六
月廿六日。正二位。上御門院天皇。建仁元年二月從一位。龜山院
天皇。弘長元年。正一位を授奉給ふ。又清和天皇。貞觀元年二月
十九日。正五位下守右中辨兼行式部少輔大枝音人を御勅使
として。神位記。財寶を奉り給ふ。又光孝天皇。仁和三年四月六
日。御勅使を差向給ひて。幣帛を奉りたまひ。又後一条院天皇
寛仁元年九月廿日。一代一度の奉幣を定給ひ。藤原季忠を
御勅使として。絹五尺。綿一屯。絲一兩を御幣とし。紫綾蓋一蓋
四角ニ六金鈴ノ平文野劔一腰ニ赤漆細攫赤漆御弓一張。箭四筋。平文鉾一
本身ハ鐵五寸。鏡一面在平文錦折立平文麻桶一口。平文線柱一本等を
神寶として奉り給ひ。其の後を御代〻奉り給ひ。ふり。又
同年十月二日。驛路鈴を賜ひき。此の外臨時の御祈。又御勅使
を差向給ひ。支を。國史國〻諸家の記録等ふも。數多所見て
世の人の知有る所ふ。自滅つ。往古ハ朝廷より。八幡熱田。
香取。鹿島等と相並べ。國〻大神宮寺今の法雲寺ハ。元和年中。松平隱岐守定勝。朝臣。廢
神宮寺の末寺ふりし東光院として。小寺の殘れりを取ふて
三河國名之内の鎮守ふりし愛宕社を。それ山ふ移し給ひけ
る時。その別當として。廢神宮寺の別院ふりし寺号を取て。法雲寺と名付給へるふて。本宮ふ出づらまる夏ふ
を。置
國史ふ所見而有ハ。伊勢大神宮。加茂。八幡。大和國石上。
伊勢國多度。近江國奥島。常陸國鹿島。越前國氣比。能登國氣多。

等のそにて。かかるく尽重く祭らせ給ひ支所知たり。祭神を
天照大御神の第三の御子。天津日子根命に坐して。日子根と
御名に負給ふる如くひかる物の。親の意を以て。物の元なりて。おくり出る意なれば。御子の弘めるべき根本なる御徳の御名なり此の
大神の御子孫の蕃く榮有而支。凡川内國造。額田部湯坐連。
茨木國造。倭田中直。山代國造。島來田國造。道尻岐閇國造。周芳
國造。倭淹知造。高市縣主。蒲生稚子。三枝部造等。古事記に見ゆ又凡河
内直。山代直等。日本書紀に見ゆ又左京神別。額田部湯坐連。天津彦根命子。明立天御影命之後也三枝部連。額田部同祖坐。同祖湯
右京神別。高市連。額田部同祖天津彦根命之後也庵智造。同上額田部同我都命孫。意富伊
世孫。彦御賀都命之後也三来名首。天津彦根命男。天久

之比乃命。後也山城國。神別。菅田首。天都命斯麻比止土命之後也山背忌寸。天都命子。天
麻比止都命之後也大和國。神別。三枝部連。額田部湯坐連。同根命十四世孫。意富
伊我津命之後也庵知造。同神十四世孫。意富建凝命之後也葦田
首。天麻比止津命之後也犬上縣主。天津彦根命之後也鳥集造。天津彦根命之後也攝津國。神
別。凡河内忌寸。額田部湯坐連。同神國造。天津彦根命男。天間見命之後也山代直。天御影命十一
世孫。山代根子之後也河内國。神別。額田部湯坐連。天津彦根命五世孫。津田部連之後也津
夫江連。天津彦根命之後也凡河内忌寸。同上大縣主。同上和泉國。神別。高市縣
主。天津彦根命十四世孫。建許呂命之後也末使主。天津彦根命子。彦稲勝命之後也茨木造。天津彦根命之
後也等。姓氏録に見ゆ此の大神の御子孫相殿に坐せまつる泥神の二大神のこゝゆゑなるべし。阿夜訶志古
ゆゑなるべし。又一目連大神と稱へ奉るを。本宮

天津日子根命の御子。天目一箇命なり。紫。伊勢。兩國の齋部の御祖神。神主小串家なり。亦の御名を天久之比乃命亦の御名ハ天久斯麻比土都命靈妙なる神德なり。亦御名を天津真良建雄命類稱なる雄しき神なり。と御名なり。と御名ハ負給有る如く。其の神靈の奇妙なりて。類稀なる建くを〻しく因しまして。支下かい〻るが如く。又古語拾遺ハ。天照大御神。天石屋戸に幽居し時。令石凝姥命取天香山之銅。以鑄日像之鏡。云ハ。令天目一箇命作雜刀斧及鐵鐸鈴の又至于磯城瑞垣宮天皇朝。漸畏神威。同殿不安。故更令齋部氏率石凝姥神。齋天目一箇神。齋二氏。更鑄鏡造劔。以為護身御璽。とあり。此の時。石凝姥神。齋ハ

八咫鏡の摹を鑄ら〻れ。天目一箇神。齋ハ草薙劔の摹を造ら志給ひつ。當時石凝姥命の八咫鏡をはくらせ給ひ。天目一箇命の草薙劔初の名。叢雲劔かて。後ハ八岐蛇を持名りしを是あり。を造らせ給ひ〻故ある事明け〻。然まを草薙劔を上ハ擧たる雜刀とある中の一振なるべ〻。又古事記ハ鍛人天津麻羅を求て空ハ彩も。亦の御名なり。日本書紀ハ天目一箇命為作金者とをあり。すなちハ。ら私うちの約まりて。らなちとあり。それ又あらざるをあり。そて此の二大神の是の伊勢國桑名郡ハ鎮座を深き故由ある支ふまを。支長けまを遺漏しつ。攝社。末社。七十余座あり。神戸もあまた有て。年中七十五度の神支のはをけるも

年經るまゝに。中古より神官寺おどのそびえ軒をならべ漸く
に神威を隱れて。近古元龜年中の兵燹に罹りて。本宮を始め
攝社。末社。神寶。記録等まで悉く所燒失。神戸も無くなりて甚く
衰へぬ。是は織田信長公。當郡長島の城攻の時。當郡の諸士等。
彼の神官寺の僧侶を誘ひて當宮に。織田家調伏の
祈をせしかよりて。後に放火せられしと云傳へ多り。この時
神官寺を初。法雲寺。外寺院とも一時に悉く燒亡。是正しく
中ごろより僧等の。大前を捧奉りたる御祟にて。即古に
に復さひとの御神慮なりと人〻云あへりきとど然有を
慶長五年。本多中務大輔忠勝朝臣。桑名城に移り給ひてより
古きあとを温ねさせ。御本宮をはじめ。攝社。末社。七十余座の中
九社の造營。神領の御寄附おどあり。又七十五度をそぶきて
年中七箇度の神支正月朔日。三月三日。五月五日。五月酉日。八月十五日。九月九日。十一月朔日を再

興したまへり。往古の神戸の内。今も神厨屋と稱へて八箇村
多度。上脇江。下脇江。小山。北猪飼。中猪飼。加尾。戸津の氏子有て。神支祭禮の神役を勤る
例なり。其の中に。五月五日を殊に大祭にして絶ぜず。領主の殿より
嚴重に祭らせ給ひ。氏子流鏑馬をたてまつる。騎。但し射手三騎。
をそなへ。具足の上に大紋を着。烏帽子を冠り。行騰
を。巖壁の如き。坂道を登り。上馬の式有て後。神主。祝。御巫。
氏子の人〻供奉仕まつりて。神輿脇江村なる御旅所。船着社
に渡御ありて。丈より程近きに山村なる潮の馬場に。神輿を移
し奉り。種〻の式ありて。其の御前にて三的を射るなり。是を
建久の頃にも神支流鏑馬ありしよし。物に見えたまへど。
當宮のそ。層應のころ。當郡を分領せし。武家の輩より始りて。
今の氏子の百姓の勤る支と。成れど。種〻の古式を失ぜず。其の
しき支。又この神支に。靈驗のくはしきを。
びなる支。多くまどる支長けまで別にいへり。此の日。往古より
神輿の渡御に。兩のさきに朝に兩ふる支もまたあるを。祭式の刺限に至るまで。密怨

れて。雨儀の渡祭あるにけるを。雨皮。雨衣類の用意なしとて公の御忌の外。祭日を延る事なく。諸國より參詣る人々いとゝ羣集せ。其の後。元和三年か松平隱岐守定勝朝臣。寛永十二年か松平越中守定綱朝臣。寛永七年松平下總守忠雅朝臣。文政六年か桑名少將定永朝臣。同少將定和朝臣と次第か宮中の造營。修理等を加へさせられ。神領或ハ神寶等奉納らせられまひ。別て定永朝臣定和朝臣の二侯より。御氏神と御信仰あらせられて。諸の御祈願。且月々かさつ。御代參を遣給ひ。殊か御崇敬厚く。祭祀給ふか因て弥愛甚古風かたち復る事と。なりなかくて神庫か納まる神寶ハ。慶長以來の物のみなりしを。いかし明和八年。本宮の

傍ある籠石神石五つの内事無くて動傾て。其のもとより鏡三十面。太刀。斧等出さるまりの此の時の支ものの奇妙なりし支。且その鏡等の圖。別か委しく書けるもの物あり いとゝ古物ぞもかて。是等のみ。中古より此神寶ぬり。此の二大神の萬か幸給て諸人を愛給ふ支世の人の知有所かゝあるもゝ委しく知る人の爲か。其の一件二件をいさ。早魃か雨を請奉り。海上か風難を祈り。火災水害を避む支を祈奉るか。靈驗のいち著く。感應ある支。響の音か應ふる如く。往古より。宮地の山の内を更ふり。村の内かも。雷のはちしといふこと。地震の憂かどを。聞傳へある事多く。氏子か疫病か煩ふ者多く。避迫他所へ出て受つるも。家か歸まる平愈ぬと

いふ支ゑ〜。別て一目連大神の。亦の御名ゆゑ負給有る如く。御稜威の。いと世ゆ希らゆるやこのりく〜ぼゆ建く雄さ〜く〜ゆる〜て。現ゆ御靈を顯し。暴風。重浪。地震。洪波ゆどの天變の時〜御山を出さゼ給ふ時ゑ。神山鳴響て御光を放ち浪の穂等ゆ入り給へゑ。大波忽ゆ所碎て。諸人を救給ふ支。年の内ゆ數度ありて。見る人聞る人。近き國〜ゆを希見〜ゆらば。遠き國〜ゆ仰ぎて參詣る人〜日毎ゆ多ゆり。おく現ゆ出ゆ以支のあきを。古昔より神殿ゆ御扉ゆ。誠や本官大神の子孫の番榮を守り給ふ御神德。又一目連大神の。身の守護ゆる刀劍ゆをゑよゆ。鐵器の類を作る御祖神ゆる故由。

又萬の支ゆ幸給ふ御稜威ゆどの支上ゆ擧而有如くゆきを。誰の人らゑ。子孫の繁昌を祈ゆをゆらむ。又武士たらむ方〜農商。又海河をゆよゆふ船持。船人。荷主の人〜ゑ更ゆり。何人ゑ。これ大神等の御愛を蒙らでゆ得ゆらぬ理ゆり。そゞて銅鐵の器物を用て。諸物を作ゑ諸職人とゆ。鍛冶。鑄物仕等ゆ天目一箇大神の御恵ゆ。一日ゑ滿べらぬを。そりゆきて齊祭べき物ゆ然るを輔祭として。故ゆ滝祠をゆつるゑ御祖神ゑ。ゆらぬゆるゆ此の大神をおきて他ゆ鍛冶の家ゆ。諸國の鑄物仕の裁判をせらるゆ。禁裏の官人これ神代の故實ゑ。国てゆ。ゆて刀劍の護身たる支上ゆ擧而有でとく令造劍以為護身御璽とゆ。人たらむゑのゑ。刀劍の護身

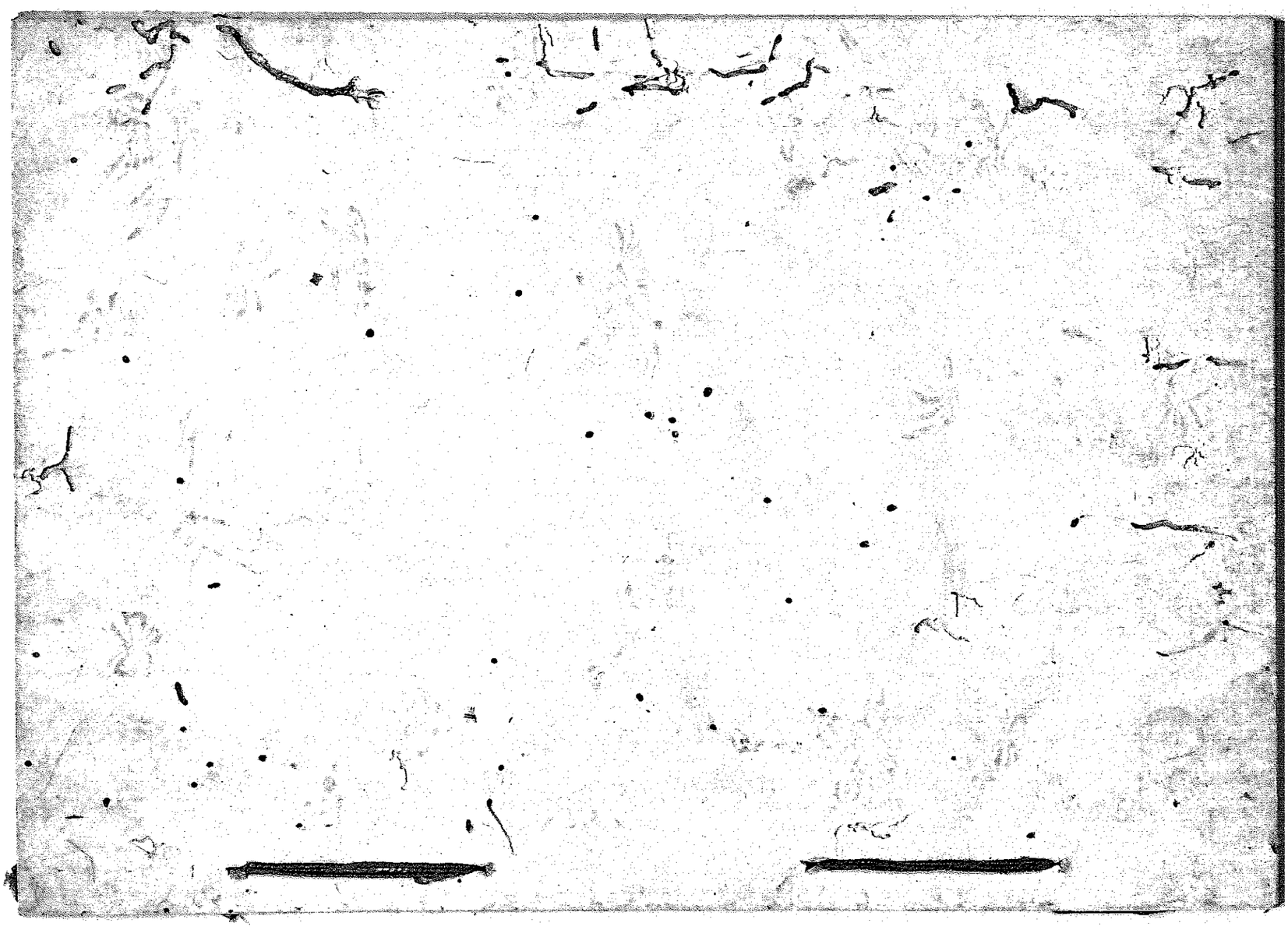
たる支。ふべくもあらず。然きを有事時も更なり。無支平常
かも。身の守護と祈りたる支。枚擧か遑あらば。往古。倭建命も
草薙の御劔を御身を離給はで。膽吹山の災妖も有ざらまし
をざれど是ハ殊ぶ故有て。此の大神の神靈をよせて造給有
神劔かしあきを。別ての支かを出きど。今の世。直人の然しも
あらぬ。刀劔とゆへど。帶劔の人と。無刀の人とか對ふを。意
を一。甚く違ひ。又旅中かても。帶劔の人かを盜賊のたぐひも
容易を得害せず。夜行ふどかを英氣をそなりて。いや心強き
をの祈きを。まして狐狸。妖魅のたぐひの。恐怖ゆ支疑ふし。
是皆刀劔の拔放ぬ所の有功かして。即天目一箇大神の神靈

の添きる故ふれをふんり。此の一廉を思ても。萬の支か外國風
れ眼前の理屈論の比類祈ぞるをおして出るべし。又神代
の事實この支。と長かをりて。今の世。何の國かても。田畑か
鳥おどし。又案山子とも云て。蓑笠着て。弓矢をてる人形をく
て立る支ふり古くを延喜古。又曾富騰とも云て。足ハ行
ふりと神書か見えり鳥獸のいふく恐怖るゝをのふり。夫を是を以て
鳥獸を怖きむと思ふ。人の心の凝きるより。其のをちか幸給
ひて人を愛給ふ。神くの寄來居して。其の鳥おどしか神靈を
よせて守り給ふ故ふきを祈り。然有をこを鳥獸をおそるゝ
なし。ふる心もなく。人形ふ作ふさる只の蓑笠かいるか

鳥獸なりとて。おぢおそれやを。是等をも思ひ給はず。神の御德を慎ゝおそれるけゝ思過を可らず。又此の故由を辨て帶る時ハ刀劔の威光もまし。自然輕さしく為られぬる理も所知て甚尊しゝ。然有故ゝ神を祭祀も其の御稜威の奇し支を辨て齋奉れを。又くもした御神愛をも蒙ることゝ

わり彩り。すゝを何ごとゝいふ邪神妖魅ゝ此方の虛を待伺ふをれゝきを。男子をこと也。刀劔を離だで有まゝ〻に夏ゝり。

加是御社の故由の大概を載しつるを。參詣多人ゝの。せちゝ尋求るゝよりゝく彩り

多度文庫

桑名市 43 55.11.7 図書館